

岩尾門下を率いて

批判経営学の形成に力を注がれた中央大学岩尾裕純先生の門下生を希望して中央大学大学院に入学した時、驚いたことに、東京で生活できるようと、まだ会ってもいない私に対して、アルバイトや仕事を留意して渡邊先生が待っておられました。京都から上京したばかりの私は、先生ご夫妻のこの面倒見の良さに感激し、その後もそれに甘えるばかりで今に至っています。当時先生は、岩尾先生のオーバードクターでした。学生からすれば、絶対に手を抜かない。先生としての信頼が厚いのは周知のことです。また驚くほど広い分野に精通しておられることも周知のことですが、それは、簿記・会計、七〇年代当時の院生としてはコンピュータ科学への高い精通、また、数学にたいする知識の高さなど、その一端は学部・大学院の頃から明らかでした。

ご研究面について簡単に触れると、最初大学院では、コトラーの「マネジリアル・マーケティング」の批判的検討からマーケティング研究に従事され、その後多国籍企業のマーケティング、多国籍企業研究に向かわれています。コングロマリットの研究はそのなかで着手されています。岩尾先生は、一九七四年出版の『経営経済学』（丸善経営全書四〇）のなかで、三次にわたる米国の企業合同運動を取り上げています。渡邊先生のコングロマリット研究は、実は師匠である岩尾先生の第三次企業合同運動の評価の誤りを正す意味を持っていました。戦後から七〇年代まで展開した第三次企業合同運動は、コングロマリット

型合併と言われました。元々コングロマリットという用語は、相互に全く関連のない異質の産業を数多く支配する複合企業を意味していました。岩尾先生は、この複合企業を生み出すものが科学技術の発展であると規定されました。そうではなく、この運動は金融資本集団の資本蓄積方法であり、金融資本が背後にいて、その金融資本グループの再編過程がコングロマリット合併として現れたことを米国下院の膨大なコングロマリット調査資料を分析して経営学的観点から明らかにされたのが渡邊先生でした。紙面の制約から、ご研究については学位論文についてだけ断片的にしか語れませんが、岩尾門下の私達にとつて渡邊先生は、研究と教育の両面においてめざすべき手本です。先生のご功績とこれまでの公私にわたるご指導に対しまして、心より感謝を申し上げます。

岐阜経済大学准教授 岩坂和幸